

## カール大帝時代の文化と其の特徴

菅 原 憲

ゲルマンの民族大移動が古代の世界を混亂の狀態に陥れてから中世の時代は始まる。爾來三百年中世の初期は所謂暗黒時代の中の暗黒時代であつてゲルマンの各種族は多少輕重の差はあるにしても全體としては古代の文化を毀傷し破壊したといつていい。其の間東ゴート族のテオデッリヒ大王やフランク族のフロードウィヒのやうな英雄人傑もないではない、前者はニベルンゲンの歌に出て來る大立物デトリッヒ・フォン・ベルン(Dietrich von Bern)であつてランケなどはゲルマンの君主、西羅馬の皇帝といふ二重の職責を完全に果した偉才として稱揚してゐるが要するに傳統的人物であり、後者の業績はツールのグレゴール(Gregor von Tours)の傳ふところであるが史料其のものゝ價值は歴史家間に疑問視されてゐるからこれも半傳説中の人といふべきであらう。

カール大帝に至つて初めて歴史的人格と云ひ得る。何故ならば帝の側近に侍した歴史家アインハルド(Einhard)のカール大帝傳(Vita Caroli Magni)は多少美化誇張した點があるとしてもそれを控

除して考へれば信憑するに足るからである。

カール大帝時代になると中世の形勢はどうかやら纏りかける、其の文化は獨自の爛漫たる美花を誇るとは云はれぬけれどゲルマン要素の種子が羅馬要素の養液を攝取して中世といふ土壤の上に文化の芽生が顯はれ初める。次いで起つた戦亂の爲にこの芽生は萎縮退嬰せざるを得なかつたけれど決して枯死したわけではなかつた。大帝によつて開拓された中世の沃土は陽春に際會しさへすれば發現すべき文化の嫩芽を懷いてゐたのである。

中世を三期に分けるならばカール大帝時代を以て、其の第一期第二期の境界とするが適當と考へる、何故ならば大帝時代に中世の特徴が判然見られるからである。これまでが中世の序曲、これらが本曲と見てよからう。

然らば中世の特徴とは何か、帝國思想<sup>インペリアル</sup>の實現であり、國家と教會の交渉である。之等は古代に於てもコンスタンチンやテオドシウスに見られぬではないが中世になつてから重大な意義を生ずる。大帝の帝國は永續し得なかつた。しかし其の統一的帝國を憧憬する精神は中世を通じて絶ゆることはなかつた。國家權力と教會權力の葛藤は中世史を織り成す經緯と云へぬことはない。大帝は一大帝國を建設して動亂の世界に安定の基礎を與へた、それには國家と教會の握手が大に與つてゐる、其の當初、國家權力は教會を保護し監視すべきであつたが後年、國家權力の動搖に乗じて教會權力

が擡頭し遂に國家と教會の抗争する因をなした。

しかし西方歐羅巴に於て一層中世を特色づけるものは羅馬文化とゲルマン文化の調和融合にあるとしなければならぬ、この兩文化の要素がうまく溶け合つて中世の文化が出來上る、大帝はこれが調停に努力した、無論それを完成するには至らなかつたけれど、其の方向を定めたとは云て差支ない。

## 二

大帝は如何にして羅馬要素とゲルマン要素の融和統一を試みたか、約言すれば政治法律軍事などの方面ではゲルマン固有の制度を採り唯之に少からざる改正を加へてゐる、宗教文學藝術の方面では羅馬の要素を盛に輸入した。カロリング朝のルネッサンスがそれである。しかし要するに採長補短が眼目であつたから帝は頑迷に國粹を固持しないと同時に外國崇拜の弊害にも陥らなかつたと思はれる。彼は一世に先んじて拉典文化を採取しながらゲルマン固有の慣習思想文學などを保護するの勞を惜まなかつた。然らば蠻風のまだ抜けない、ゲルマンに高級の文化をどうして移植し得たか、帝は先づ教會を利用した。

ゲルマン固有の宗教觀念には地獄極樂に該當する來世觀もないではないが彼等の幼稚な原始的思想でも若し當つて現世の利福を希求するといふが關の山である。しかるに戰亂動亂の時代が続く、

彼等ゲルマンのうちには例へばブルグンド族のやうな榮枯盛衰洵に變轉極まりなき境涯を辿つたものである。斯うした運命の翻弄を現り見たゲルマンに死後の生命、來世の光明を高唱する基督の教は一大驚異であり、自ら彼等も隨喜渴仰の念を禁じ得なかつたものであらう。また動搖擾亂の世、頼るところを知らぬ人民の唯一最後の避難所は教會であり僧院であつた。何故ならば無智蒙昧のゲルマンと雖も神の殊寵に浴すると聞く僧侶に挑戦することは先づ避けたからである。

かやうな事情で基督教はゲルマンの間にかなり急速に普及し八世紀頃にはフランクを初めとして西ゴートもロンバルドも羅馬正教を奉じ教會及び僧侶は勢力を扶植した。カール大帝がこの教會に提携し其の勢力を利用して古典文化の移植を企てたのは甚機宜を得たものであつた。

八〇二年の法令 (Capitulare) によると帝國領内の人民は皇帝及び教會に絶對服従すべきことを命じてゐるが之に先だつて七七七年パーデルボルンの議會ではザクセン族の各州ガウから代表者を招集して、彼等が若し基督教を無視し又は國王に忠誠を缺くことあらば彼等は自由と所有を失ふものであるとの誓を立てさせ<sup>(2)</sup>、また七八二年リップスブリングの議會にはザクセン各州は勿論近隣の異教徒、即ちデーンやアヴァールの君主の使節も出頭してゐたがこの時にも法令を布告し、要點は些かでも基督教等に違背するものをば嚴刑に處する、而かも國家の任命した地方官に反抗した場合より一層嚴罰を課するといふにあつたらしい<sup>(3)</sup>。之等は畢竟大帝が教會役員たる監督長老を地方官

吏たる公デュークカウント伯と同列の地位に置いたもので<sup>(4)</sup>、要するに大帝は教會を保護し而も其の勢力を借て一般文化の普及に資せんとした政策のあらはれに外ならぬ。

三

大帝はゲルマン文化羅馬文化を融合して所謂「羅馬風ゲルマン風の文化」の基礎を築いたのであるが戰勝國フランクの低級劣等な文化と洗練爛熟を経た伊太利の文化とは兎角和合し難いものがあったに相違ない、だから其の調停を勤めた教會及び之を支持した大帝の努力は想像するに餘りありといはねばならぬ。

そこで大帝時代ゲルマンの文化はどんな状態にあつたか。大帝の居城は屢移動した、いや帝は州から州へと移り行つたといふべきであつて七六七年から八一四年まで即ち兄カールマンとの共同治世から大帝の崩御まで帝は一萬一千哩を旅行したと云はれるが、つまり當時の租税は農産物であり、交通は不便であるから之を二三の地點に集中して帝室の用に供することは出来ぬ、帝は一族廷臣を伴つて帝領から帝領へと移轉し、その場所々々でその貢物を消費するといふ有様であつた。尤河流其の他の關係でインゲルハイム、ナイメーヘン、アーヘンなどは便利な位置にあり、殊にアーヘンは永住地ではなかつたけれど大帝の都城となり、アンギベルト(Angilbert)は此處に行はれた法王廷や同敎國からの使節饗應の狀を記して華やかな大帝の宮廷生活を彷彿せしめるものがある<sup>(5)</sup>とい

ふけれど、兎も角當時割合に開けて居つたフランクさへこの通りであるからゲルマン一般の文化程度は推して知るべきである。

フランクの宮廷には早くから羅馬要素が入り込んでゐた。しかし尙ゲルマン要素の濃厚だつたことはいふまでもあるまい、そして大帝はゲルマン固有の思想習慣傳統をなるべく保護し助長するに努めた。特にゲルマンの言語文學を尊重して文法の研究傳説歌謠の編纂を奨励したことは餘りに有名である。帝は自然科學の方面では特に星學に興味をもち、羅馬の曆法などをも輸入したのであるがその月名にはゲルマン名を用ゐさした。彼はまた兵制軍政にも改を加へ、貧困な自由民には兵役義務の負擔を輕減してやつた。即ち個人的兵役は一定額の土地所有者にのみ課する、貧困なものは其の一群のうちから一人だけ採るとした。だがこれも大帝の創見、或は羅馬の影響によるのではなくして以前あつた原則を復活したに過ぎないといふ<sup>(6)</sup>。

ゲルマンの原始時代は知らず、ツールのグレゴールなどによると六七世紀頃のゲルマン諸種族は淫荒風をなし、メロウインガ朝の諸王には殊に甚しきものがあつた。カール大帝の父ビ、ン、兄カ１ロマンなどは羅馬教會に歸依したためか基督教的な結婚觀念を懷き、性的弊風はフランク族の間に漸く薄らいでゐた、然かるに大帝は復、征來の習慣に陥り、性的には放縱であつたといはねばならぬ<sup>(7)</sup>。

これなどは國粹保存の例として云爲すべき限りでないがその結果大帝には可なり多數の子女があつたらしい、そして帝は彼等をしてゲルマン風の生活觀念を維持させた。傳統的には姫君ルオトルード、エンマ、ベルタなど、ロリツヒ、アインハルド、アングルベルトなどの戀物語が傳つてゐるが帝の子女の訓育ゲルマン的に嚴格であつて王女達も裁縫の技を勵み安逸は許されなかつた<sup>(8)</sup>。王子達が武藝や狩獵に勵精したことはいふまでもない、唯子弟教育に於てゲルマン從來の風習と異なるのは男女共に初歩ではあるが古典の文藝を教へられるといふにあつた。かやうにして大帝はゲルマン要素の保護育成には絶えず力を注いだ。

## 四

大帝が初めて伊太利の地を踏んだのは七七四年で羅馬をも訪れた。しかしこの時の伊太利滞在は甚短期間でロンバルドを征服しただけである。七八一年帝は國王としてロンバルドに相當時日間滯留し、其の國土を視察した大帝は親しく伊太利の文物に接し、先づその優秀なる文化に驚歎したものであらう。大帝の父ピピンは既に羅馬の文化に憧憬し彼の懇望に應じて法王廷の使節はアルプスを越ゆる毎に種々の文化所産物をフランクに將來したとあるが太帝はいまやロンバルドの君主であるから其文化を本國に輸入するは容易であり、またそれを頻りに實行したものと思はれる。

帝の歸國に際し伊太利からの隨伴者中當時有名な學者が數名ある、中にも文法家たるベトルス

(Petrus von Pisa)、歴史家たるパウル・ディアコヌス(Paul Diaconus)及びバルマに居つた英國人アルクイン(Alcuin)も見えてゐる。帝を中心とした文人學徒の襲團謂はアカデミーはこゝに始まる、之には相次いで諸國の學者が加はりフランク人のうちからもアインハルドやアンギルベルトの外にテオヅルフ(Theodulf von Orleans)やヒベルニクス(Hibernicus Exul)なども居つた。

但この時は古典の文藝を摸倣するにとゞまりまだ積極的に創作するには至つてゐない、そして先づ必要なのは教育であつた。英國ではアルドヘルム・オヴ・マルメズベリー(Aldhelm of Malmesbury)がアウグスチヤンやイシドールを範として上流の少年及び成人に特殊な教育訓練を施してゐたといふ、アルクインは之をフランクに移入した、その方法は彼の著作によつて知ることが出来る<sup>(9)</sup>。

アルクインのフランクで實施した教育法は對話の形式による、若い子弟ならば少年と幼年とを對座させて互に問答さす、意見の違ふ場合又はどちらも答辯の出來ぬ時に教師が助言を與へる。成人の場合には以上の課程を終へたものとして教師は唯質問に答へ理解しかねる問題に對して説明を與へるといふにあつて大帝自らも後者の方法を以てアルクインの教育を受けたものと思はれる。

斯うした個人的教育は男女を問はず大帝の近親子弟に施行されたのであるが、更に皇族以外の教育も行はれた、アルクインは寧ろこの方に力を入れたらしい、宮廷學校以外、この種の學校はアルクインの指導を受けて諸所に出來た。大帝の學者を優遇したことは有名であるが帝は彼等を待つに



全く友人を以てした、そして學者のうち古典文化傳達のために可なり遠隔の地方に教師として赴任したものもあるが書面で以て交友の關係は依然繼續され又大帝親しく質問を發して意見を徴し或は教を乞ふといふ具合な大帝の態度は全く赤心から出た友情の現はれといふべきものであつた。

## 五

古典的教養の進行するに従つてこゝに獨自の創作も始まつた、しかし其の成果は果して民族的のものといひ得るかは疑問であらう。カロリング朝のルネッサンスは尙不安定な飛躍的な憾があつて民族精神その儘の表現としては慊らぬものがないとはいへぬ。大帝の奨勵の下に起つた新しい宮廷詩には潑潑たる生命の躍動を缺き形式的な作爲があつて詩興の脈動は感ぜられぬ、ヒベルニクスやアンギルベルトの大帝を歌へる、エルモルプス・ニゲルス(Ermoldus Nigellus)の次帝ルドウィッヒ及び其の時代を歌へる孰れも如上の缺陷があるといふ。實際帝を取り卷いた學者のうち嚴密な意味での詩人は甚少い、アルクインの詩には警句諷刺洒落などもないではないが要するに教訓的格言的詩だといはれる。少しく後になると眞の詩人も現はれ、特に傑出したのはワラフリッド・ストラボ(Walahfrid Strabo)であつて牧歌叙事詩教訓詩などに優れた作品を出したが中にも「ウェツチンの幻影」(De visionibus Wettini)で名を成し中世に於ける新詩形幻影詩の創始者とされてゐる。尙、ブリュム僧ワンデルムルト(Wandalbert)の「殉教者の曆」(Martyrologium)は月々に變り行く自然

及び人間生活を精細に觀察して描寫したものだといふ。しかし九世紀末になると快適な牧歌は見られなくなつて教訓詩が多い、この頃には詩も音楽もひたすら教會に奉仕する様子が見える。

當時の詩は無論拉典を用いる、だから詩作に先だつて拉典の文法其の他種々の智識が必要である。大帝時代散文の著作としてはアインハルドの「カール大帝傳」の外に帝國年代記やスマルグズ(Smaragdus)の「王冠」(Diadema)「君主道」(Via regia)などもあるが最尊重されたのは科學上の智識であつて神學者の代表者はアルクインその人に外ならぬ、彼は文學者といふよりも神學者といふが當つて居り、「三位一體の信仰」(De fide trinitatis)は彼の神學的述作であつた。

かやうにしてカール大帝時代の文學的運動は最初必ずしも教會的ではなくむしろ自由に發展すべきであつたのに何日しか宗教的教會的に傾き、大帝の死後には神學が最重きをなしヒエロニムスやアウグスチンなど一般に愛讀せられるにいたつた。

バイブルの解釋も亦文法や神學の研究を促した、この傾向の代表者はラバン(Hiraban)で博學精勵、バイブルの註釋その多數の著書を出してゐるが更に「ゲルマンの教師」(Praeceptor Germaniae)の著がある、これは僧俗一般のための百科全書として珍重せられたものであつた。

## 六

當時の學問は即ち七學(artes liberales)と呼ばれ其のうちの三科(trivium)は文法、修辭、演説、

科(quadriuium)は星學、幾何學、算數學、音樂を意味する、羅馬時代にあつては演説の表現法、及び辯舌力は男子の教養中第一の要件であつたからその所謂三科は羅馬の市民としての必然的要求から出來たものであらうが、羅馬も帝政の末期になると市民の公的政治的生活は以前のやうでなくなり、從來の必要は必しも必要でなかつた。それにも拘はらず四五世紀頃の高等教育機關は相變らざるの儘の課程を維持してゐた。だから其の頃既に形式的な現在の生活には適合しないものであつた。この教育課程を其の儘内容を變更せずしてカロリング朝のルネッサンスは輸入した。従つて當時の教育が時代の要求と沒交渉であつたことは容易に想像される。だから教育も形式に流れ、詩歌も作詩的技術が尊ばれ、散文も内容の如何に力を注ぐよりもむしろ辭句を弄するの風が多かつた。それなら指導よろしきを得ればかやうな形式に墮したものでなく、自由にして獨創的な研究が行はれ得たが、これも當時に於ける一般ゲルマンの文化程度では覺束ないと言はなければならぬ。それから只單に古典の文物を模倣するといふこともこの時代にあつてはやむをぬどころであり、まゝやがて發展すべき文化の準備時代として初めて相當意義あることゝ見るべきであらう。

かやうにカロリング朝のルネッサンスは學問文學の上に於てまだ模造模寫の域を脱してはゐない。加ふるに大帝の以後戰亂が續く、且又基督教は其の布教傳道上先決問題として異教的、固者のゲルマン的思想文物を根絶しやうと企てたから大帝時代に相當蒐集編纂されたゲルマン古代の文

學傳説歌謠の如きものは次帝ルードウィッヒの頃に復散逸してしまつた、ルードウィッヒに捧げられた敬虔王の名はこの意味からは有難いものでない。

割合に神學的でありまた基督教の干渉を免れたと思はれる歴史的述作或は年代記なども略々九〇年を境として影をひそめてしまつた。

## 七

次に美術の方面を一瞥する。

ゲルマン民族が古典の造形美術に接して彼等固有の美術を顧みたときそれは如何にも貧弱なものであつたに相違ない。

カール大帝はまづ古典の建築を採用した。

ゲルマン固有の王宮は木造で堂々たる大廣間の建物が中心となりそれに相應した苑圍があり、各種の目的に基づいた建物が附屬する。羅馬風の帝宮はむしろ陣營に由來しそれに人工の粹をめて造營した石造建築である。大帝はこの兩者を巧に調和させ、殊に四、五、六世紀頃のラヴェナ式を愛したからこれを加味し、更に禮拜堂を加へこゝに出來上つたのがインゲルハイム、アーナなどの宮殿である。そして一般的には廣間と禮拜堂が宮殿構成の中核となり、それらの建造物ゲルマン風の木柱廊で結合さした。また居室や附屬室は木造にし暖房裝置も羅馬風の床下爐ヒポカステイムでは

くしてゲルマン風の暖爐を用いた。教會建築では民族的傳統と教會の希望が一致し難いところもあつて。奥地の傳道教會は殆例外なしに木造でありゲルマン式であつた。しかし羅馬風の浸み込んでゐる地方の教會は主としてラヴェンナ式を採用した、斯くして出來たのがミンスター寺やアーヘンの宮廷禮拜堂である。之等は當時兎も角雄大なものを製作しようといふ欲求の如何に旺盛であつたかを説明するものといつていい。

繪畫や彫刻は建築と異なつて宮廷の贅澤な要求からして先づ小規模な工藝品の發展を促した。彫刻は象牙彫に初まる、そのうちにも中々の逸品があつて伊太利初期のルネッサンスの作品と區別のつかぬものもあるといふが繪畫は更に進歩した。

カール大帝はビザンツに對する關係上偶像崇拜には極力反對したが教會の壁畫は裝飾の意味で特に許した。のみならず帝は偶像崇拜とは全く切り離して美術として又は裝飾として人民に繪畫を鑑賞せしめる方針を採つたらしい、そこで繪畫は美術としての價值が尊重せられ謂はば宗教から解放される緒に就いたのであるが教會の壁畫はまだ宗教の羈束を伴ふ危険がある。之に反して書籍の挿畫や表紙畫は偶像崇拜と比較的關係が薄い、斯した小畫はメロウインガ朝以來流行して居つたれば基督教の教會的傳説には餘り累せられることなく發達した。そして大帝時代からは規模も大きくなり壁畫には一群を組成するものがあり、書籍畫も之と相俟つて進歩した、だが同時に宗教的傾向

少くとも宗教的題材を用いるやうになつて來た。但その傳統を全然脱却しわたとは云へぬまでも自由には捉はれることなく新しい獨立した手法を取つたとはいつてよからう。この傾向を明に指示するものとしては略々八五五年頃の作と傳はるドラゴ―僧正(Bischof Drago von Metz)の「聖禮」が挙げられる。

之を要するにカール大帝時代前後に繪畫は可なりの程度まで進歩した。但それは裝飾的圖案的といふ條件を附してのことであつて純乎たる藝術品として考察する場合は別問題といはなければならぬ。人物に就いていへば實際とは遙に遠い空想的な體勢を示し、餘程の佳作でも圖案と半解な寫實の中間にとゞまる。風景なども山川草木が裝飾的になつて居つてそれら相互の大小、遠近の關係は顧慮されてないといふ、全體の有機的關係、個々の自然的形體を表現する能力も理解も缺如してゐるといふなければならぬ。彩色、色調なども馬は綠、岩は煉瓦色の赤、頭髮は青であらはされ、稀には落着いた色調もないではないがギラ／＼したものゝ方が多い。濃淡による遠近の表現なども全く知られなかつたらしい。要するに當時の繪畫は裝飾的類型のであつて對象其のものゝ個性はあらはれてゐない。

唯こゝに注意すべきは人體の美の理想としてゲルマン風が重きをなしたことである。大帝時代の初年から基督や使徒は鼻の高い、小さな唇の牽き締つた、小兒らしい眼に眉毛の掩ひかぶさつた優

しい面長な容貌になつてゐる、之はゲルマン型であつて羅馬型ではない。また裝飾圖案の題材は多種多様であつて概括的にはいへぬけれど、古代のものには動物模様ゲルマンものには植物模様が多し、メロウインガ朝時代のものにも尙動物式が少くないが、其の末期からそろ／＼植物式が多くなる。この傾向は九世紀の中頃から著しく目立ち、動物模様は次第に減少した、そしてこゝに發達した植物式圖案は古代の模様畫とは殆ど關係がないといはれる。

## 八

扱カール大帝時代羅馬文化の採用によつてゲルマンの文化はどの程度まで促進されたか、繪畫や建築に於てはまだものたらぬ點があるにしても可なりの發展を來し、而かもそれが割合に民族化し模倣模造の域を越えて民族獨自のものとなり、表現に於ても題材に於ても次第にゲルマン的要素が顯著になつて來た。しかるに文學の方面では同様の過程を見ることは出来なかつた。殊に詩歌は外國の言語を使用するといふハンデキャップがあるから、いつの世、どの國でも急速に多くを望むことは無理であらう。

以上、カール大帝が羅馬の文化を輸入し、而かもゲルマンの文化を保護し、そして兩文化を如何なる程度まで同化させまた發展させたかを略々説いた積りである。大帝時代を以て全く羅馬時代の模倣と見るものもある、また大帝のルネッサンスは時代に適合しない。従つて實際的効果はないと

するものもある。其の後者の適例としては大帝が羅馬教會の壘に倣つて自然經濟の時代であるに拘はらず金貨業を禁止したことを舉げてゐる<sup>(10)</sup>が、これらの弱點は否定し難いとしてもゲルマンの文化を開發し更に之を進めた功績は沒すべからざるものといつてよからう。

註 1. Bryce, *Holy Roman Empire* P. 66—67

Ranke, *Weltgesch.* V (1921) S. 205

2. *ibid* S. 212

3. *ibid* S. 240

5. Lamprecht, *Deutsche Gesch.* II. S. 56

9. Dopsch, *Grundlagen d. Europ. Kulturentwickl.* II S. 139—142, 142

7. G. Jung, *Geschichtsmoral d. dent. Wilbesinn* M. Metalter S. 40—41, 44

8. *ibid* S. 46

6. Lamprecht, *Deutsche Gesch.* II S. 59—62

10. Dopsch, *Grundlegend. Europ. Kulturentwickl.* I. S. 7.